

10月予報（全13枚）

病防第37号

令和7年（2025年）9月26日

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）

令和7年度（2025年度）発生予報第7号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和7年度（2025年度）病虫害発生予報第7号（10月予報）

I 気象予報：令和7年（2025年）9月25日福岡管区気象台発表

◎向こう1ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
九州北部全域 (含、山口県)	気温	10	10	80
	降水量	20	40	40
	日照時間	40	30	30

II 【今後、注意すべき病虫害】

1 発生の概要

作物	病虫害名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
大豆	ハスモン ヨトウ	やや少	少	やや少(－)	やや多～やや 少 (±)	気温高(+) 降水多～並 (－)	フェロモントラップ 調査 合志市 少 八代市 やや少 阿蘇市 やや少 山都町 並 (－)
	カメムシ類	並	並	並(±)	やや多～並 (±)	気温高(+) 降水多～並 (－)	予察灯調査 合志市 ミナミアオカ メムシ 多 アオクサカメ ムシ 少 (±)
茶	カンザワ ハダニ	並	並	並(±)	並～やや少 (±)	気温高(+) 降水多～並 (－)	ほ場調査 茶業研究所 やや多(+)
カンキツ	ミカンハダニ	やや多	並	やや多(+)	やや多～並 (±)	気温高(+) 降水多～並 (－)	ほ場調査 果樹研究所 やや少(－)

作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
果樹全般	果樹カメムシ類	多	多	—	カキ やや多～並 カンキツ, ナシ やや多～ やや少 (+)	気温高(+)	予察灯調査 合志市 多 宇城市 多 天草市 多 (+)
夏秋トマト	葉かび病	やや少	並	少(—)	並(±)	気温高(—) 降水多～並 (+)	
	すすかび病	並	並	やや少(—)	並(±)	気温高(+) 降水多～並 (+)	
	灰色かび病	少	並	少(—)	並～やや少 (—)	降水多～並 (+)	
冬春トマト	黄化葉巻病	やや多	多	黄化葉巻病 並 コナジラミ 並 (±)	やや多～並 (±)	(コナジラミ) 気温高(+)	
イチゴ	炭疽病	やや多	やや多	やや多(+)	並～やや少 (±)	気温高(+) 降水多～並 (+)	
	ハダニ類	並	やや多	やや少(—)	やや多～並 (±)	気温高(+) 降水多～並 (—)	
ウリ科野菜	退緑黄化病	やや多	やや多	—	(退緑黄化病) キュウリ 並 メロン 並～やや少 (コナジラミ) キュウリ, メロン 並 (±)	(コナジラミ) 気温高(+)	CCYV保毒虫数 (熊本市, 山鹿 市, 合志市) 多(+)
冬春 果菜類	コナジラミ類	やや多	やや多	冬春トマト 並(±)	夏秋ナス, 冬春トマト やや多～並 キュウリ, メロン 並 (±)	気温高(+)	



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
冬春 果菜類	アザミウマ類	並	並	—	夏秋ナス, キュウリ 並(±)	気温高(+)	
野菜類全般	ハスモンヨト ウ	並	やや少	夏秋トマト, 冬春トマト, イチゴ 並 (±)	アスパラガス 多～並 冬春トマト やや多～並 夏秋トマト, 夏秋ナス, イチゴ, サトイモ, キク 並 (±)	気温高(+)	フェロモントラップ 調査 合志市 少 八代市 やや少 阿蘇市 やや少 山都町 並 (—)
	オオタバコガ	並	やや少	夏秋トマト, 冬春トマト 並(±)	夏秋トマト, 冬春トマト, 夏秋ナス, ピーマン, 夏秋キャベツ, 冬キャベツ, キク 並 (±)	気温高(+)	フェロモントラップ 調査 合志市 少 八代市 やや少 阿蘇市 少 山都町 多 (—)

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(—)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

2 予想発生量、根拠、対策等

◎大豆

1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 9月の巡回調査では、ヨトウムシ類食害株率は32.3%（平年40.6%）、幼虫数は9.4頭/10株（平年11.5頭/10株）と平年比やや少の発生であった（－）。

イ フェロモントラップによる8月第5半旬～9月第4半旬の誘殺数（10月発生の前世代成虫）は、山都町で平年並、阿蘇市・八代市で平年比やや少、合志市で平年比少であった（－）。

表 各地域のハスモンヨトウの誘殺状況

市町村名（地域名）	本年（頭）	平年値（頭）	平年比（%）
合志市（栄）	217.0	1582.3	13.7
八代市（鏡）	688.6	977.5	70.4
阿蘇市（一の宮）	848.0	1390.1	61.0
山都町（鶴ケ田）	128.1	153.7	83.4

(3) 対策

ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するため、若齢幼虫の食害により白色化した被害葉（白変葉）が認められたら防除を行う。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

ウ 病害虫防除所のホームページの「調査データ」内に掲載しているフェロモントラップの誘殺状況（<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>）を確認し、防除の参考にする。

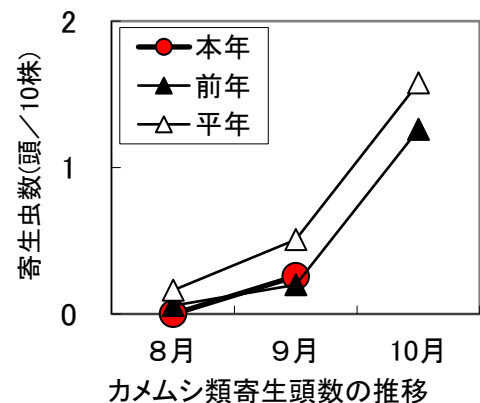
2) カメムシ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 9月の巡回調査では、寄生頭数0.3頭/10株（平年0.5頭/10株）と平年並の発生であった（±）。

イ 合志市に設置した予察灯による調査では、8月第1半旬～9月第4半旬の誘殺数は、ミナミアオカメムシが245頭（平年147頭）と平年比多、アオクサカメムシが4頭（平年26頭）と平年比少の誘殺数であった（±）。



(3) 対策

ア 開花終期から子実肥大期において、7～10日おきに2～3回の薬剤防除を行う。

イ ミナミアオカメムシ、アオクサカメムシに対するピレスロイド系薬剤（IRACコード：3A）の効果は劣るので、ほ場での発生種を確認して薬剤を選択する。

ウ 病害虫防除所のホームページの「調査データ」内に掲載している予察灯の誘殺状況（<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>）を確認し、防除の参考にする。



◎茶

1) カンザワハダニ

(1) 発生量：並

(2) 根拠

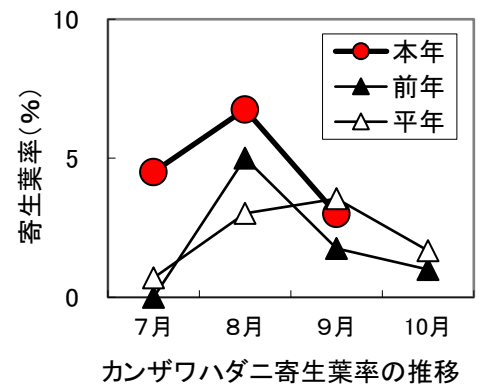
ア 9月の巡回調査では、寄生葉率 3.0% (平年 3.6%) と平年並の発生であった(±)。

イ 茶業研究所(御船町)の9月第4半旬の調査では、寄生葉率 9.0% (平年 3.0%) と平年比やや多の発生であった(+)。

(3) 対策

ア ほ場での発生状況を確認し、密度が高い場合は、規定の散布量で葉裏まで薬剤が届くよう丁寧に防除を行う。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎カンキツ

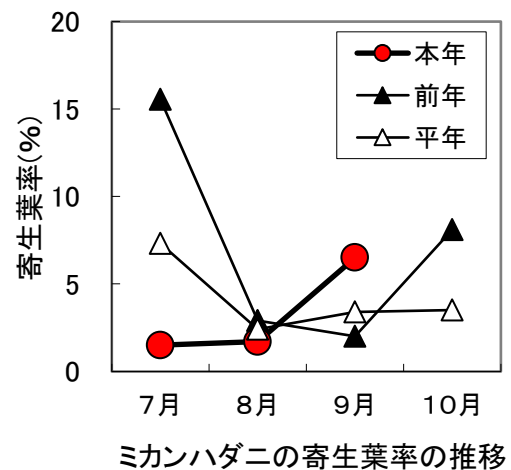
1) ミカンハダニ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

ア 9月の巡回調査では、雌成虫の寄生葉率 6.5% (平年3.4%)、寄生頭数8.4頭/10葉 (平年1.0頭/10葉) と平年比やや多の発生であった(+)。

イ 果樹研究所(宇城市)の予察ほ場では、9月第5半旬に雌成虫の寄生葉率3.0% (平年12.6%)、寄生頭数0.3頭/10葉 (平年2.0頭/10葉) と平年比やや少の発生であった(-)。



(3) 対策

ア カメムシ類防除のため、ピレスロイド系殺虫剤 (IRACコード: 3A) を使用した園地では、天敵等への影響によりハダニ類の発生が助長されるので、こまめに園を観察し、雌成虫の寄生葉率が30~40%または、寄生頭数が5~10頭/10葉に達したら直ちに防除を行う。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎果樹全般

1) 果樹カメムシ類

(1) 発生量：多

(2) 根拠

ア 9月上旬のヒノキ結果枝に寄生していた成幼虫数は16.8頭／5枝（平成3.7頭／5枝）と平成比多であった（＋）。

イ 県下3地点の9月第1～4半旬までの予察灯による果樹カメムシ類の誘殺数は、いずれの地点においても平成比多であった（＋）。

表 9月第1～4半旬の予察灯によるチャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ及びクサギカメムシの誘殺数（頭）

地点名	チャバネアオカメムシ			ツヤアオカメムシ			クサギカメムシ		
	本年	平成	平成比	本年	平成	平成比	本年	平成	平成比
合志市	1,005	281	358%	158	144	110%	97	37	262%
宇城市	5,116	2,135	240%	751	741	101%	－	－	－
天草市	37,216	3,744	994%	5,769	1,557	371%	－	－	－

※宇城市は9月第3半旬まで。

(3) 対策

ア 果樹カメムシ類は、局地的に飛来し、被害をもたらすことがあるので、定期的に園を見回り、早期発見と薬剤による初期防除を徹底する。特に、山間部や山沿いの園地は被害を受けやすいので注意する。

イ 果樹カメムシ類の予察灯及びフェロモントラップの誘殺数の詳細なデータを病虫害防除所のホームページの「調査データ」内 (<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>) に掲載しているので、最新の誘殺状況を確認し、防除要否や適期防除の参考にする。

ウ ピレスロイド系殺虫剤（IRACコード：3A）は、天敵等への影響が大きく、ハダニ類の発生を助長するので、最小限の使用にとどめる。

エ 詳細は、令和7年9月17日付け発生予察注意報第3号 (<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/289992.pdf>) を参照する。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

◎夏秋トマト

1) 葉かび病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

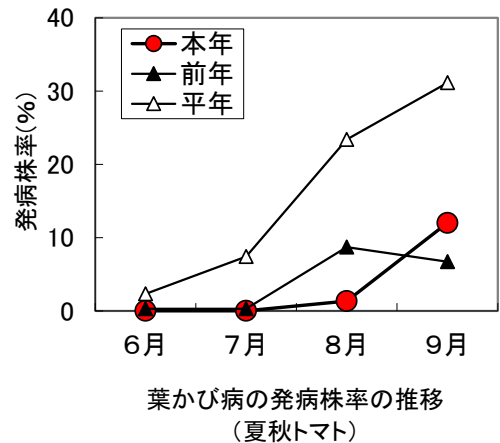
ア 9月の巡回調査では、発病株率12.0%（平年31.1%）と平年比少の発生であった（－）。

(3) 対策

ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

イ 被害葉や被害果、老化葉は早期に除去する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) すずかび病

(1) 発生量：並

(2) 根拠

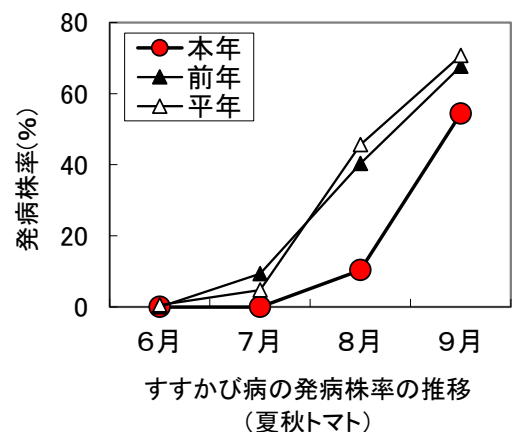
ア 9月の巡回調査では、発病株率54.3%（平年70.7%）と平年比やや少の発生であった（－）。

(3) 対策

ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

イ 被害葉や老化葉は早期に除去する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



3) 灰色かび病

(1) 発生量：少

(2) 根拠

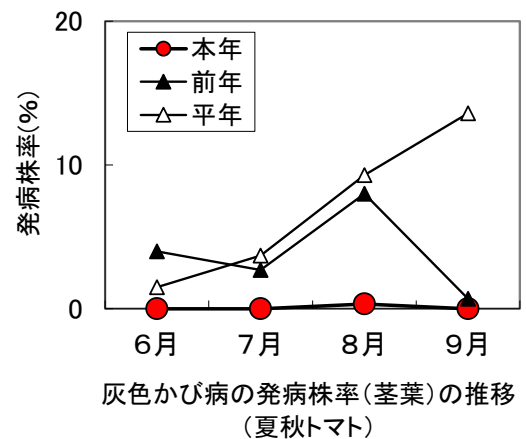
ア 9月の巡回調査では、茎葉の発病株率0.7%（平年13.6%）、果実では発病が確認されず（平年0.1%）、平年比少の発生であった（－）。

(3) 対策

ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。

イ 被害葉や老化葉は早期に除去する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎冬春トマト

1) 黄化葉巻病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

ア 9月の巡回調査では、発病株は確認されず（発病株率平年0.1%）、平年並の発生であった（±）。

イ 9月の巡回調査では、コナジラミ類の寄生葉率1.3%（平年1.8%）と平年並の発生であった（±）。

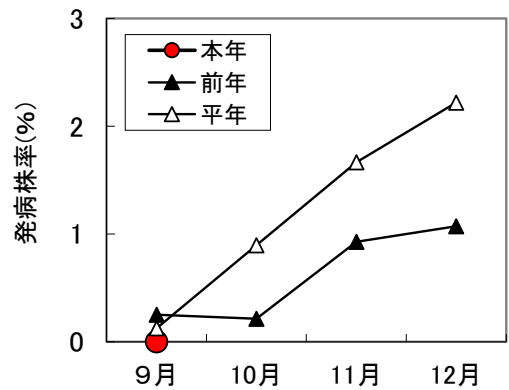
(3) 対策

ア タバココナジラミを施設内に入れない対策を徹底する（3 防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。

イ 発病株は二次伝染源となるので、見つけ次第直ちに施設外に持ち出し処分する。

ウ 施設内部及び周辺の雑草は、タバココナジラミの生息・増殖場所となるので除去する。

エ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、タバココナジラミの早期発見に努める。



黄化葉巻病の発病株率の推移
(冬春トマト)

◎イチゴ

1) 炭疽病

(1) 発生量：やや多

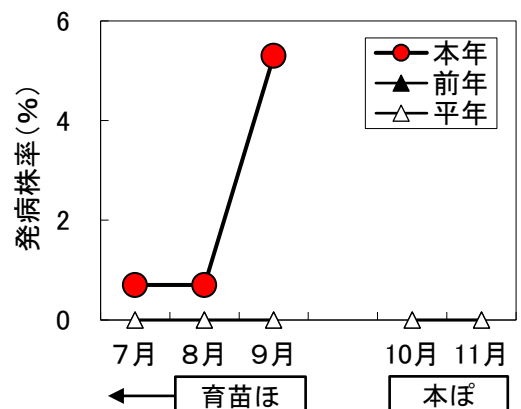
(2) 根拠

ア 9月の巡回調査では、一部のほ場で発生が多く、発病株率5.3%（平年0.0%）と平年比やや多の発生であった（+）。

(3) 対策

ア 天井ビニル被覆までに予防散布を行い、発生を抑制する（3 防除のポイント等の「**イチゴにおける定植後の炭疽病及びうどんこ病の防除対策**」を参照）。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



炭疽病の発病株率の推移(イチゴ)

2) ハダニ類

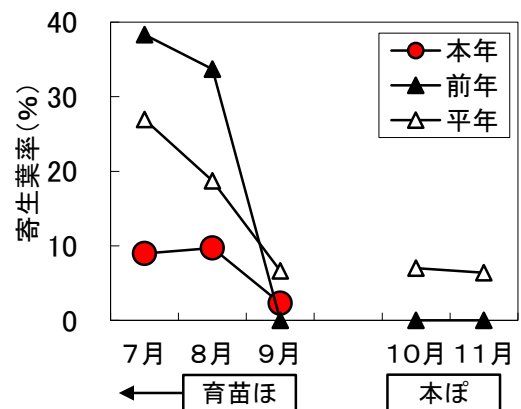
(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 9月の巡回調査では、寄生葉率2.3%（平年6.7%）と平年比やや少の発生であった（-）。

(3) 対策

ア 寄生密度が高くなると防除が困難なため、天井ビニル被覆前に防除を徹底する（3 防除のポイント等の「**イチゴではビニル被覆前にハダニ類の防除を徹底しましょう**」を参照）。



ハダニ類の寄生葉率の推移(イチゴ)



◎ウリ科野菜

1) 退緑黄化病

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠

ア 8月上旬～下旬に屋外で採集したタバココナジラミのウリ類退緑黄化ウイルス（CCYV）保毒虫数は、過去3年と比べて多かった（+）。詳細は、令和7年9月5日付け発生予察技術情報第7号（<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/289215.pdf>）を参照する。

(3) 対策

- ア タバココナジラミを施設内に入れない対策を徹底する（3 防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。
- イ 施設内部及び周辺の雑草は、タバココナジラミの生息・増殖場所となるので除去する。
- ウ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、タバココナジラミの早期発見に努める。

◎冬春果菜類

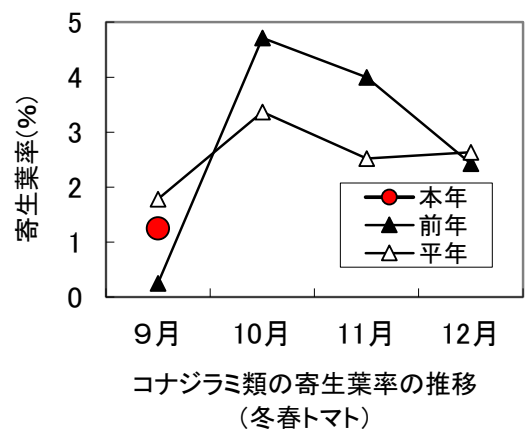
1) コナジラミ類

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠

ア 9月の巡回調査では、冬春トマトの寄生葉率1.3%（平年1.8%）と平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

- ア 気温が高いうちは増殖しやすいため、現在発生しているほ場では、早期に防除する。
- イ タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病、ウリ類退緑黄化病、スイカ退緑えそ病の病原ウイルスを媒介するので、トマト、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。
- ウ 施設内部及び周辺の雑草は、生息・増殖場所となるので除去する。
- エ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、早期発見に努める。
- オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) アザミウマ類

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠

ア 9月の防除員報告では、夏秋ナス、キュウリで平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

- ア 10月に入っても、施設内では発生が認められるので、粘着トラップを設置し、早期発見に努め、発生初期からの防除を徹底する。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。
- イ ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。
- ウ 施設内部及び周辺の雑草は、生息・増殖場所となるので除去する。
- エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎野菜類全般

1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 9月の巡回調査では、夏秋トマト、冬春トマトでは被害株は確認されず（平年 夏秋トマト0.7%、冬春トマト0.4%）、平年並の発生であった（±）。

イ フェロモントラップによる8月第5半旬～9月第4半旬の誘殺数（10月発生の前世代成虫）は、山都町で平年並、阿蘇市・八代市で平年比やや少、合志市で平年比少であった（－）。

表 各地域のハスモンヨトウの誘殺状況

市町村名（地域名）	本年（頭）	平年値（頭）	平年比（%）
合志市（栄）	217.0	1582.3	13.7
八代市（鏡）	688.6	977.5	70.4
阿蘇市（一の宮）	848.0	1390.1	61.0
山都町（鶴ケ田）	128.1	153.7	83.4

(3) 対策

ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除を行う。

イ 施設栽培では、成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。なお、ネット上に産卵し、ふ化幼虫が施設内に侵入することもあるので注意する。

ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したらただちに除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

2) オオタバコガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 9月の巡回調査では、夏秋トマト、冬春トマトでは寄生株は確認されず（平年 夏秋トマト0.1%、冬春トマト0.0%）、平年並の発生であった（±）。

イ フェロモントラップによる8月第5半旬～9月第4半旬の誘殺数（10月発生の前世代成虫）は、山都町で平年比多、八代市で平年比やや少、合志市・阿蘇市で平年比少であった（－）。

表 各地域のオオタバコガの誘殺状況

市町村名（地域名）	本年（頭）	平年値（頭）	平年比（%）
合志市（栄）	34.0	105.6	32.2
八代市（鏡）	10.3	19.7	52.3
阿蘇市（一の宮）	9.4	43.6	21.5
山都町（鶴ケ田）	58.0	37.0	156.7

(3) 対策

ア 施設栽培では、成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。

イ 1卵ずつ産卵するため、卵での発見は困難である。幼虫は、花や果実、頂芽を好んで被害するため、よく観察し被害が拡大する前に防除する。果菜類では果実内部に、結球する葉菜類では結球内部に食入し、薬剤がかかりにくくなるため、食入前の早期防除を徹底する。

ウ 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除を行う。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

3 防除のポイント等

野菜のウイルス病まん延を防止しましょう

本県では「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「スイカ退緑えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病原ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

これらの微小害虫は、気温が高い時期に活発に活動します。これから定植を行う作型では、育苗期や定植直後がウイルスに感染するリスクが高まる時期です。そこで、以下の対策を必ず行いましょう。

1 保毒虫を栽培ほ場に「入れない」対策

上記のウイルス病は、微小害虫がいなければ感染拡大しません。そこで、微小害虫を野外から施設内に入れないようにしましょう。感染が早ければ早いほど、経済的被害が大きくなるので、特に定植期の対策はしっかり行いましょう。

本ほでの対策

- (1) サイド開口部は目合い0.4mm以下（アザミウマ対策の場合は目合い0.8mm以下）の防虫ネット、谷換気部は、目合い1mm以下の防虫ネットで被覆する。また、被覆ビニルや防虫ネットに破損や隙間が無い点検を行い、必要に応じて補修する。
- (2) ハウス周辺に雑草および野良生えが残っていると、微小害虫が飛び込みやすくなるため定植10日前までに除去する。
- (3) 育苗ハウスから本ほへ苗を運ぶ際には、野外の微小害虫が付かないように運搬車等の荷台を防虫ネットや幌等で覆う。また、定植作業中は、出入口をきちんと閉めて作業する。

2 保毒虫を「増やさない」対策

施設内での感染拡大を防ぐため、野外から侵入した微小害虫を増やさないようにしましょう。また、施設内での発病を抑えることで、栽培終了後に保毒虫が野外へ飛び出す危険性を減らしましょう。

- (1) 定植前に、登録のある薬剤を処理する。育苗期に処理ができていない場合には、定植時に登録のある粒剤を必ず処理する。
- (2) ハウス内に粘着トラップを設置し、侵入した害虫の密度を低下させる。
- (3) 施設内部及び周辺の雑草は、微小害虫の生息・増殖場所となるので徹底除去する。
- (4) 冬春トマトでは、野外からのコナジラミ類の飛び込みがほぼ無くなる時期（11月）にタバココナジラミバイオタイプQに効果がある薬剤をローテーションで使用する。
- (5) 発病株は二次伝染源となるので、見つけ次第直ちに施設外に持ち出し処分する。
- (6) ウイルス病抵抗性品種であってもウイルスを保毒するため、微小害虫の防除を継続して行う。



イチゴにおける定植後の炭疽病及びうどんこ病の防除対策

1 炭疽病

定植後は降雨により保菌株からの炭疽病菌が飛散します。そこで、以下の防除対策を徹底しましょう。

＜防除対策＞

- (1) 天井ビニル被覆までは予防散布を行う。
- (2) 発病株は早期にほ場外に持ち出し、ビニル袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。

2 うどんこ病

気温が高い時期には潜在感染し、菌そうが見えなくなっています。開花期までに防除を徹底しましょう。

＜防除対策＞

- (1) 初期発見に努め、発病葉や不要な下葉は早期に取り除き処分する。
- (2) 開花期までに薬剤防除を徹底する。薬剤は葉裏に十分かかるように散布する。
- (3) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

イチゴではビニル被覆前にハダニ類の防除を徹底しましょう

ビニル被覆後はハダニ類が増加しやすい環境となり薬剤による防除が難しくなるため、被覆前にハダニ類の発生を無くしましょう。

＜防除対策＞

- (1) ほ場内部及び周辺の雑草は、生息・増殖場所となるため除去する。
- (2) ハダニ類は下葉の裏に多く寄生しているので、老化葉は薬剤防除前に必ず除去する。
また、薬剤防除の際は、薬液が葉裏に十分かかるように、丁寧に散布する。
- (3) 除草後の雑草や葉かぎ後の老化葉は、ほ場周辺に放置するとハダニ類がほ場内に再侵入するため、ポリ袋に詰めるなどして持ち出し適切に処分する。
- (4) ビニル被覆の1週間程度前に効果の高い殺ダニ剤を散布する。ただし、施設内の数ヶ所で発生が見られる場合は、事前に気門封鎖剤によって発生量を減らした上で散布する。なお、気門封鎖剤は高温時など薬害が生じやすい条件での使用は避ける。
- (5) 果実に薬害や汚れを生ずる恐れのある薬剤については、果実に影響の無い時期に使用する。
- (6) 天敵（チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ）を放飼する場合には、天敵への影響が残る期間を考慮し、薬剤の種類や使用時期に注意する。



Ⅲ 【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項等
		平年比	
夏秋トマト (高冷地)	黄化葉巻病	やや多	巡回調査では、コナジラミ類が平年比多(+)。 防除員報告では、平年比やや多～並(+)。 タバココナジラミが病原ウイルスを媒介するため、定期的に薬剤散布を行う。発病株は抜き取り、適切に処理する。
イチゴ	うどんこ病	並	巡回調査では、平年並(±)。 防除員報告では、平年並(±)。 防除については、3 防除のポイント等の「イチゴにおける定植後の炭疽病及びうどんこ病の防除対策」を参照する。
秋メロン	べと病	並	防除員報告では、平年並(±)。 初期発生を認めたら直ちに薬剤散布を行い、薬液が葉裏によく付着するよう丁寧に行う。
野菜全般	アブラムシ類	並	巡回調査では、冬春トマト、イチゴで平年並(±)。 防除員報告では、イチゴで平年比やや多～並、トマト、キュウリ、メロン、夏秋ナスで平年並(±)。 ウイルスを媒介するので、防虫ネット等では場内への侵入を防ぐ。
【野菜病害虫の共通対策事項】 ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める(病害)。 ・多発後は防除が困難になるので、早期発見と初期防除に努める。 ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。			

Ⅳ その他

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

◎ 詳しい内容等については 病害虫防除所(農業研究センター生産環境研究所予察指導室)
(TEL: 096-248-6490) にお問い合わせ下さい。

※なお、本文はホームページ「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」上に掲載しています。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>